

以森伝心

前理事長 柏原康夫筆

No.

53

京都の森を守り育てる運動に参加しませんか

巻頭特集

先人の知恵と技術を

次代に繋ぐために

自然と人の技の融合——北山杉

京都北山丸太生産協同組合

理事 松本 吉弥

- 京都の森の仲間たち
雲ヶ畑コモンズ・結い林業組合（京都市）
- 企業参加の森林づくり
- 森の出前授業
- 活動報告



先人の知恵と技術を 次代に繋ぐために —自然と人の技の融合—北山杉

京都北山丸太生産協同組合 理事 松本 吉弥

室町時代から続く歴史と手入れの行き届いた美しい景観で有名な北山杉。その育林と加工には高度な技術が要求され、日本の伝統的な建築である茶室や数寄屋造りにおいて欠かせない素材として重宝されてきました。その北山杉の伝統と技術を受け継ぐ京都市北区中川で、京都北山丸太生産協同組合の松本理事にお話を伺ってきました。

—北山杉に関わるようになったきっかけは？

北山杉の歴史自体は室町時代に遡ります。うちは代々北山杉の育林から販売まで手掛けていて、元を辿ればもっと先まで遡ると思いますが、屋号としては私で5代目になります。

子供の頃は丸太の皮むきを半分遊びで手伝っていて、高校生でアルバイト程度に手伝っていたくらいですね。特に跡を継ぐように言われることもなく、好きにしたらいい、という感じでしたので、私自身は大学を出て3年間、外で会社勤めをしていました。

そしてその後、一度、北山丸太の市場の様子を見せてもらうことがあったのですが、当時は北山丸太が非常に高値で売られていたんです。会社勤めの給料を考えると、その額が破格に見えたんですよね。それが過ちのもと(笑)。戻ってきて家業を手伝うことにしたのです。

木造建築の変遷と北山杉を巡る変化

私が子どもの頃は、中川の集落では北山杉に関わっている家がほとんどでした。植林から枝打ち、伐採後の「磨き」などの加工まで全部家族でやる家もあれば、大規模な山主が何人か雇っているところもありましたし、複数の山主から作業を請け負う形で事業をされている方など含め、業態はいろいろでした。

私が北山杉に仕事として関わりだした当時は昭和60年代、日本が好景気に沸いていた頃で、住宅建設の好況などから木材業界全体の景気が上り調

子でした。当時は戸建てを建てたら必ず一室は和室があって、北山丸太が床柱としてよく使われました。温泉旅館や旅館の建築も盛んでしたが、そこでも和室が一般的で、丸太がたくさん使われていました。

最盛期は中川の集落近隣だけでは賄い切れないぐらいの需要があったので、京北(京都市右京区)や日吉(南丹市)へと、エリアを広げて北山杉が植林された時期もあります。中川の集落からそうした地域まで出かけて行って、技術指導をされる林家さんもたくさんおられました。

その潮目が変わるのが、バブル経済の崩壊の頃です。阪神大震災のあった平成7年頃あたりからは木造建築全体が打撃を受け、少し遅れて北山杉の需要ががたっと落ちたのです。

目に見えない丸太の表情を「見極める」技術

—別業界から北山杉の世界に飛び込んで、感じられたことはありますか？

まず「奥が深いな」と感じました。技術を一から教えてもらったという

ことはなく、一緒に作業を手伝いながら覚えていくわけです。例えば枝打ちの仕方にしても、



ただ枝を落とすだけではありません。切り口をすばっと綺麗に、幹に傷跡を残さないように枝を打つ（落とす）にはやっぱりコツが要って、力任せにやってもいけません。センスが求められる作業ですね。北山杉の一本一本ごとに、枝をどれくらい残すか、どの枝を打ってどの枝を残すか、考えないといけないことがあります。ちょっと太い木はたくさん枝を打って残す枝を少なくし、ちょっと弱い木は枝の量を多めに残して、といったように、全体の成長量を調整して太さを揃えてやることもします。立木を一本一本見ながら、同時に森全体を見ながら考えていくわけです。これは自分が実際に携わってみないとわからないことでしたね。

もう一つ難しいのが、丸太の表面の色艶の出し方。伐採する時期をちょっとでも間違えると、ムラの無い美しい艶が出ないのです。秋から冬にかけて、木が水を吸い上げていくのがちょうど止まる、だんだんと表面が硬くなって、冬目になるそのちょうどどのタイミングを見て伐採する必要があります。私も当初はこれがよくわかっておらず、焦って秋口早めに伐って失敗したりしていました。伐採時期が早すぎると、丸太の表面に艶の有無でムラが出たりしてしまい、市場に並べたとき見栄えが良くありません。逆にタイミングが遅すぎると、今度は硬くなりすぎて干割れが起こりやすくなります。一般の木材であれば、表面の美しさにそこまでこだわることはありませんから、北山杉ならではの難しさです。

また、「皮剥き」や「磨き」という工程があります。今では水圧を掛けて一気に木の皮を剥ぎますが、昔はヘラを使って手作業で皮を剥いていました。これが、伐採の適期を過ぎてしまうとうまく剥けなくなるんです。だからちょうど手で剥けるギリギリのタイミングで、色艶の良くなるのを待って伐採する、という見極めが大事になります。このあたりを、失敗を何回か経験しながら、10年ぐらいかけて次第に覚えていきました。

自然と人の技が融合した「絞り」の美しさ

北山杉には、その美しさにさらに付加価値をつけるために、「人造絞り」という技術がありますが、これも一朝一夕に出来るものではありません。自然に表れる「天然の絞り」を模して、それに近づくような表面の凹凸を出せるよう、幹に箸状の当て木を巻き付けて、「絞り」の凹凸を付けていくわけですが、仕上がりをイメージしながらバランスよくデザインしなければいけません。

この技の元祖で、新谷さんという方が編み出された「新谷絞り」というやり方があるのですが、



それをもとに、自分で試行錯誤することも経験しました。当て木をほどいた状態で絞りを戻し、戻りす

ぎないように枝を落として、表面からは見えない表情を「読む」ことが必要になります。

枝打ちにしろ「絞り」の技術にしろ、自分の施業の結果はすぐにはわかりません。「絞巻き」といって絞りの模様を人工的に出すための作業は伐採の2年くらい前に行いますが、全体の出来上がりは、枝打ちなどのそれまでの作業でも決まってくるものです。最終的な出来は、伐採して皮を剥いてみないとわかりません。自分がやったことがこれで良かったのか、商品として判断できるようになるには20年はかかります。植えてから数えれば、30年してようやく出来上がりが確認できるもので、そこが製品としての難しさでもあり、奥の深いところ、面白さでもあると思います。

北山杉は扱いとしては一般の木材とは違い、銘木市場で取引されます。銘木概念に厳密なものはないのですが、通常銘木市場で取引されるのは、ケヤキやヒノキでも100年生以上になります。銘木市場は現在岐阜がメインですが、昔は秋田や吉野なども活気がありました。そうした、100年かけて自然によって育てられた銘木が取引される市場で、一般のスギよりもさらに若い30年生そここの北山杉が肩を並べて扱われているわけです。

このことが、枝打ちから絞り、磨き、と手間も知恵もかけて生み出された、北山杉ならではの付加価値を付ける「技」が認められている証拠とも言えます。

きめ細かい品質を高く評価する「目利き」が減っている

北山で現在も毎月行われるセリには、銘木問屋が買い付けに来られます。しかし、そういう問屋さんもかなり減っています。最盛期には全国から7、80軒来られていた時もありましたが、今はうんと減って、20軒ぐらいでしょうか。奈良や大阪、岐阜、四国あたりからも買い付けに来られますが、昔は関東や九州からもたくさん来られていました。

昔は、丸太の表面の色艶や絞りの出方など、きめ細かい品質に着目したセリがされていましたが、そうした目利きの業者さんも減ってきています。建築の現場でも、品質にこだわった材を使える大工さんが減ってしまったということもあると思い

ます。北山杉の品質を高く評価される「目利き」が減るとい
うことは、以前ほど技術が高く評価されなくなっ
たということ、経済的にもそれだけ手間をかけた
作業が続けられなくなってしまうということです。



受け継がれてきた技術を後世に繋ぐには

山側を見れば、北山杉以外の林業もしながら北山杉の商いを続けているところもありますが、北山杉に特化した事業者というのは激減しています。これだけ需要が減っている状況ですから、以前は専業でやれていたのが、他の山の仕事に行ったり、林業以外の仕事にも携わったりせざるを得なくなっています。

このままの状況が続けば、30年と言わず、10年ぐらいで、北山林業は危機的な状況に陥ってしまうかもしれません。それはつまり、長い間手をかけて育てられてきた材が供給されなくなってしまうということです。ここで引き継がれて来た山を維持していかないと、一度途絶えさせてしまえば簡単に取り戻せるものではありません。

北山杉の育林に重要な枝打ち作業には行政の補助もあり、一般の林業では5年に1回の枝打ち作業が補助対象となりますが、北山杉でそんなに間をあけては売り物になりません。最低でも3年ぐらいまでの間隔で枝打ちをしていかないといけません。また、そうした補助だけで後継者を残せるかという、そうではありません。やはり北山杉に対する需要があって、良い材を出すことで経済的に回るというサイクルが無いと、後継者は育っていかないので。

世界的に注目される北山林業 —持続的な技の林業への関心

経済的には厳しい状況が続いていますが、地球全体の問題として持続可能性への関心が高まる中で、国外からの関心をいただく機会が増えていきます。先日も、フランスとドイツのテレビ局が、北山杉を「持続的な林業の形」として紹介したい、と撮影に来られました。500年生と言われる台杉も撮影していかれました。

他にも、タイやインド、ケニアなど各国から視察に来られています。彼らからすれば、これだけの

技術が、長い間、受け継がれてきたということも特殊なようです。先ほども触れたように、北山林業は林業と言いつつも、北山丸太には手間暇をかけた工芸品の側面もあります。こうした面も、海外からすればなかなか例がないようです。

いいものを作ることが評価され 次の山づくりに繋がる「循環」を

こうした関心を背景に、今年度から、行政や企業の支援を受けて北山杉の海外への輸出に向けた市場調査を始めます。製品として受け入れられるには、それぞれの市場の文化的価値観や木材への評価なども影響してきます。

マーケットとして中国が良いのか、ヨーロッパがよいのか、といったことを含め検討し、ゆくゆくは現地での商談会などに繋げられればと思っています。

需要拡大のために海外の需要を呼び込めれば新たな展開に繋がります。ただ、それだけじゃなく、やっぱり国内や地元京都でもその価値を伝えていきたいですね。今、北山杉の魅力は若い方に殆ど知られていないんです。年配の皆さんは、「昔床柱でよく使っていた」と覚えておられますが、今や和室のある家庭が減り、若い方となると本当にご存じない。ですので、これからは、和室の有無にかかわらず、取り入れやすい製品を開発していければと思っています。

昨年には京都の建築設計事務所の紹介で、東京南青山のアパレルショップの店舗で使っていただいた例もありますし、桂川や北大路のイオンの店舗の内装に北山杉を使う事例もあります。モダンなデザインの内装など柔軟な取り入れ方で、木に触れる機会を増やしてもらうための使い方を提案していければと思っています。今年に入って北山杉のブランド化プロモーションとしてPR冊子も作成しました。これをツールとしてどんどん魅力を発信していきたいと思っています。

いいものを作って、それが経済的に評価されないと、山元での再生産という循環には繋がりません。今山にある材を伐採して出してしまっただけで終わってしまっただけでは後には続きません。これからも北山杉を植え、育て、評価される製品を生み出す技術を繋いでいくために、今できることをしていきたいと考えています。



Shinzone表参道店 店舗内装

京都の

木の仲間たち

雲ヶ畑コモンズ ・ 結い林業組合（京都市）

京都市の北部、鴨川の上流に位置する雲ヶ畑。その昔京の都に木材を供給するために朝廷の木工寮所属の杣人たちが集落を築いたのが始まりとされ、山の合間の清流沿いに昔ながらのたたずまいの家々が並びます。

今回は、この地で、地域で受け継がれてきた森林の手入れをされている雲ヶ畑コモンズ・結い林業組合の皆さんにお話を伺いました。

一 鴨川の源流を守り、都の再建を支えた雲ヶ畑

鴨川の源流、都の上流域に当たる雲ヶ畑では、昔から子どもたちは川の水を汚さないように教えられてきました。地域での林業の歴史は古く、西暦1700年頃から植林されていたとされ、禁裏御料（きんりごりょう）と呼ばれる皇室の直轄地として木材を納めていた歴史もあります。「どんどん焼け（江戸時代末期の蛤御門の変による京都の都の大火）」の頃は、都の再建のために必要とされる木材価格の高騰が起こったという記録も残っています。

建築材以外にも、地域で生産する広葉樹の薪や炭は、長くエネルギー源として重用され、我々も家のおばあちゃんから「昔は薪や炭を担いで鷹峯まで歩いて売りに行ったもんだ」というような話を聞かされて育ってきました。



一 始まりは林業ボランティアの受け入れ

我々の活動が始まったきっかけは、もともとは平成12年頃「林業ボランティアが活動できる場所がないか」と声が掛かったことまで遡ります。当時森林組合に勤務されていた久保さんが受け入れの核となり、学生を中心としたボランティアの皆さんに地域の山の手入れ作業をしていただきました。それが契機となり学生を中心としたサークル「杉良太郎」が生まれ、京都大学や京都市内のいくつかの大学の学生さんが作業に参加され、のちには京都大学の学生が中心となった「林業女子」の活動を受け入れる山主としても、地域でのつながりが出来てきました。



こうした頃、もう一つの大きな契機となったのが、ドイツへの視察です。平成21年9月、地域の森林所有者、学生、行政関係者、建築設計関係者の10数名で、林業の先進地ドイツに向かう機会を得ました。そこで目にしたのは、500年以上受け継がれてきた民有林で、森林所有者自らが森林経営の長期計画、伐採、搬出まで手掛ける「自立経営」の姿でした。一家の歴史とともに受け継がれてきた森林に誇りを持ち、長期的な視点を持ち経営する様子に感銘を受け帰ってきました。

一 「手間返し」の考えと「コモンズ」の理念

その後、この視察の成果を形にしよう、と、「雲ヶ畑コモンズ・結い林業組合」が設立されました。

「コモンズ」という名前の由来は、特定の個人や団体に所有されず、地域社会全体で共有・管理される資源である「コモンズ」という理念について半田良一先生が触れられている書評をメンバーが雑誌で見つけたのがきっかけです。まさに私たちがやろうとしているのはこれだ！と。

もともと雲ヶ畑には「手間返し」といって、農作業等を協働して行い、手伝ってもらったら同じように労働で返す、という「協働」の習慣がありました。それまでは山の管理自体はそれぞれの家ごとで行うのが殆どだったのですが、過疎高齢化や木材価格の下落などで状況が一変した今、地域の森林にもまさにこの「コモンズ」の考え方が求められていると考えたのです。この考えが、日本語で言えば「結い」の精神だと、同じく名前に込めました。

一 地域の力で、地域の財産を受け継いでいけるように

振り返ってみれば地域での活動は20年を超えます。ここまで続けてきたのには、活動の振り返りや経営や資金の流れの明確化、常にメンバー合意のもとルールづくりをしてきたこと、山の作業も安全重視で講習等も欠かさず続けてきたこと、そして地域内外のつながりを大切にしてきたことかと思えます。学生時代に作業に来てくれた山に、就職後もまた顔を出してくれる人や、離れても雲ヶ畑とつながり続けてくれている人たちのネットワークも健在です。今の日本の林業政策において、私たちの大切にしている「地域協働での林業」は二の次にされているように感じるがありますが、本来非常に重要なものだと思っています。我々にできることを持ち寄り、地域の力で、地域の財産として「コモンズ」を受け継いでいきたいと考えています。

団体プロフィール 雲ヶ畑コモンズ・結い林業組合

設立：平成25年 会員数：9名

活動地：京都市北区

活動概要：地域の森林整備・活用、ホダ木販売等

企業参加の森林づくり活動報告

〈協会に送付いただいた活動報告より抜粋して掲載しています〉

4月5日(金)	一般財団法人三洋化成社会貢献財団、 三洋化成工業株式会社	和束町
4月6日(土)	グンゼ株式会社 株式会社島津製作所	綾部市 南丹市
4月19日(金)	関西電力労働組合京都地区本部	京丹波町
4月20日(土)	株式会社村田製作所	亀岡市
5月11日(土)	グンゼ株式会社	綾部市
5月12日(日)	エルセラーン化粧品株式会社	長岡京市
5月18日(土)	京セラ株式会社 ワタキューホールディングス株式会社	京田辺市 井手町
5月25日(土)	株式会社村田製作所	亀岡市
6月1日(土)	公益財団法人日新電機グループ 社会貢献基金	南丹市
6月6日(木)	日東精工株式会社	綾部市
6月16日(日)	KDDI株式会社	南丹市



日東精工株式会社



グンゼ株式会社



関西電力労働組合京都地区本部



エルセラーン化粧品株式会社



ワタキューホールディングス株式会社



京セラ株式会社



公益財団法人日新電機グループ社会貢献基金



KDDI株式会社

府民公開講座2024夏「京丹波で巡る-ふるさとの森と木づかい」

2024年6月14日、京都の豊かな歴史文化や景観を支える森林の大切さについて学ぶ府民公開講座「京丹波で巡る-ふるさとの森と木づかい」を開催しました。当日は会員企業・団体から29名にご参加いただきました。



緑の募金「森の出前授業」

この「森の出前授業」は、森林体験活動の指導者を「森の人材バンク」からご紹介し、実施しています。出前授業を希望される場合は、事務局（巻末参照）までお問い合わせください。

5月23日



みざわ保育園
長尾山（亀岡市）

6月11日



北野幼稚園
同園観察林（京都市左京区）

6月19日



はこべ保育園
長尾山（亀岡市）

7月27日



京都文教小学校
イシダの森（京都市左京区）

企業からの寄付による植樹・環境教育事業

1月24日



キョーラク百年の森基金事業（植樹）
シオン幼稚園（舞鶴市）

2月20日



平和の緑づくり事業（植樹）
ルンビニこども園（舞鶴市）

4月20日



キョーラク百年の森基金事業
「京北の森で春を楽しもう！」
合併記念の森（京都市右京区）

5月25日

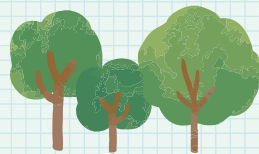


国際ソープチミスト京都協賛
「東山の森を歩こう！」
高台寺山国有林（京都市東山区）

6月1日



(株)イシダ・(株)中央倉庫協賛
「イシダの森でアカガシの巨木に会おう！」
イシダの森（京都市左京区）



—— 講座に参加して —— 林業の現場体験から得られたもの 山田 光浩

当日総勢30名ほどで京丹波町の現場に入り、まず驚いたのはそこで使用されている最新の重機の凄さでした。木を倒すスピード、枝を打つ速さ、カットする正確さ、次の動作へ移る重機との連携など、従来は人手で実施していた全ての作業が機械化・自動化され、ほんとうに作業が進化していることに衝撃を受けました。

森林組合の方にお聞きしたところ、最大の課題は人材であり、重機を扱う若者の育成も必要であることに加えて、やはり後継者を育てる人材育成が最も重要とされていました。林業経営は新たなフェーズに入り、環境保全や森林との好循環を果たすSDGs経営の視点を持つ新たな人材の育成が今後の課題と感じました。

京都には伝統のある北山杉に宿る先人たちの歴史が集積したところから、京丹波のように最新技術を駆使するところもあり、各々が持つ知恵と技術を次世代につなぐ新たな視点での経営者を育成していけるようになればとの思いが芽生えました。私たち世代が先人の思いを継ぎ、温暖化の進む地球環境に優しい林業家を育てるように努めていけるようになればと思います。

事務局からのお知らせ

ご寄付お礼

令和6年2月21日

子どもたちの森林体験学習の趣旨にご賛同いただき国際ソロプチミスト京都様からいただいたご寄付に対し、感謝状を贈呈しました。



令和6年2月

光洋マテリアル株式会社様からの「緑の募金」に対し、感謝状を贈呈しました。

令和6年3月4日

オムロンソーシャルソリューションズ株式会社「みんなでつくるエコ活サークル」様からの「緑の募金」に対し、感謝状を贈呈しました。



令和6年3月8日

京都府ホンダ会様から店舗での募金箱への募金と、ハイブリッドカー販売台数に応じていただいた「緑の募金」に対し、感謝状を贈呈しました。



令和6年2月16日

子どもたちの森林体験学習のために、株式会社中央倉庫様からいただいたご寄付に対し、感謝状を贈呈しました。



令和6年3月

株式会社平和堂様からの「緑の募金」に対し、国土緑化推進機構から感謝状を贈呈しました。

令和6年3月4日

ダイドードリンコ株式会社様から「緑の募金付き自動販売機」の売上にに応じていただいた「緑の募金」に対し、感謝状を贈呈しました。



活動報告

令和6年6月26日

令和6年度定時総会を開催し、令和5年度決算及び役員を選任等について承認されました。



緑の募金ご協力のお願い

緑の募金は、地域や学校の緑化活動や、未来を担う子どもたちの森林環境教育などに使われています。皆様のご協力をお願いいたします。



●郵便振替や銀行振込で

- 郵便振替
00920-7-239523
京都モデルフォレスト協会緑の募金
- 銀行振込 京都銀行府庁出張所
普通 3154305
公益社団法人 京都モデルフォレスト協会

窓口の利用で振込手数料等が免除されます



●商品購入や募金箱で

「緑の募金付商品」を購入したり、「緑の募金箱」に直接募金することでご協力いただけます。「緑の募金付商品」開発・販売や募金箱の設置等、様々な形でご協力いただける店舗様、事務所様も募集しています。

令和6年春 募金実績



9,988,482円

ご協力ありがとうございました

会員PR欄

Sankyo Seiki

三洋化成 Sanyo Chemical

GS YUASA

香老舗 松榮堂

佛教大学

茶野 和久傳

連合京都 JAPANESE TRADE UNION CONFEDERATION KYOTO

京都の森を守り育てる運動に参加しませんか
当協会は、個人や企業、ボランティア団体などに幅広く参画いただき、力を合わせ京都の森を守り育てる取り組みを行っています。
入会のご案内一詳しくはこちらをご覧ください



入会案内資料をご希望の方はご連絡ください。

発行: 公益社団法人 京都モデルフォレスト協会 〒604-8424 京都市中京区西ノ京樋ノ口町123 京都府林業会館3階

TEL&FAX 075-823-0170 E-mail kyomori@kyoto-modelforest.jp

URL https://www.kyoto-modelforest.jp facebook https://www.facebook.com/KyotoModelForest

